

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第175号

イザヤ 65:1

平成22年4月30日

こうして主はききんを地の上に招き……主はひとりの人を彼らに先がけて送られた。ヨセフが奴隷に売られたのだ。彼らは足かせで、ヨセフの足を悩まし、ヨセフは鉄のかせの中に入った。彼のことがそのとおりになる時まで、主のことは彼をためした。王は人をやってヨセフを解放し……ヨセフを自分の家のかしらとし……支配者とした。これはヨセフが意のままに王の高官を縛り、王の長老たちに知恵を与えるためだった。イスラエルもエジプトに行き、ヤコブはハムの地に寄留した。主はその民を大いにふやし、彼らの敵よりも強くされた。

主は人々の心を変えて、御民を憎ませ……そのしもべモーセと、主が選んだアロンを遣わされた。彼らは人々の間で、主の数々のしるしを行い、ハムの地で、もろもろの奇蹟を行った。主はやみを送って、暗くされた。彼らは主のことに逆らわなかった。主は人々の水を血に変わらせ、彼らの魚を死なせた。彼らの地にかえる群がった。王族たちの奥の間にまで。主が命じられると、あぶの群れが来た。ぶよが彼らの国中に入った。主は雨にかえて雹を彼らに降らせ、燃える火を彼らの地に下された。主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木を打ち、彼らの国の木を砕かれた。主が命じられると、いなごが来た。若いいなごで、数知れず、それが彼らの国の青物を食い尽くし、彼らの地の果実を食い尽くした。主は彼らの国の初子をことごとく打たれた。彼らのすべての力の初めを。主は銀と金とを持たせて、御民を連れ出された。その部族の中でよろける者はひとりもなかった。エジプトは彼らが出たときに喜んだ。エジプトに彼らへの恐れが生じたからだ。 詩篇105:16-38

幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。まことに、彼らは不正を行わず、主の道を歩む。あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはないでしょう。あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。 詩篇119:1-8

詩篇の中には、主の例祭のとき、祈祷式文として用いられたと思われるものがたくさんあります。イエス・キリストは十字架上で亡くなられる前日、一日早い「過越の祭り」を十一人の弟子たちと祝われ、そのとき、主を信じる者たちの間で守られるべき「主の晩餐」を新しく制定されましたが、歌われたのは詩篇113~118篇でした。過越の祭り（厳密には「種を入れないパンの祭り」）や仮庵の祭りのように一週間続く例祭の場合、七日間の礼拝祈祷式文として、一日に二つの詩篇（夕に始まり朝に終わる朝夕二回）が詠まれたとする見解があります。主の例祭の最後の日の夕方（ユダヤ暦では次の日）にも詩篇が一つ詠まれたので、一週間の祭りであれば、二篇ずつ七日分に最後の一篇が加えられて十五の詩篇が詠まれたのでした。同様に、八日間の祭りであれば十七の詩篇が詠まれたこととなります。詩篇は意識的な構成で五巻に分けられていますが、第三巻（73-89篇）は十七の詩篇で構成されており、まさにこの目的にかなっているのです。詩篇の第四巻と第五巻（両方合わせて、90-150篇）も、[十五の詩篇のまとめ]×4=60篇で構成されており、最後の150篇を全詩篇のまとめとみなすと、詩篇の最後の二巻、第四巻と第五巻も、例祭の祈祷式文に用いられるように構成されているといえるのです。

この見解によれば、105篇から119篇は、最初の十四篇は「過越（種を入れないパン）の祭り」のための七日間の祈祷書として、最後の119篇は次の祭り、すなわち、過越の祭りに続く三大例祭の二番目の祭り「ペンテコステの祭り」に、祈祷書として用いられたとみなすことができます。これらに続く次の十五の詩篇のまとめりは「都上りの歌」と前書きされた120-134篇で、まさにシオンに向かう巡礼者たちの賛美祈祷の詩篇なのです。また、モーセがシナイ山で十戒を与えられたのは伝統的に「ペンテコステの祭り」のときであったとみなされていますが、詩篇119篇が神の掟を喜ぶ非常にユニークな詩篇であることから、この見解は十分考察に値するといえます。イスラエルの民は律法授与により神への従順が命じられ、神に導かれる新しい歩みを始めたのでした。神の御前に義とされることは、罪人にとって所詮不可能なことですが、神の一方的な憐れみによって、まず義とされ、子羊の血によってエジプトでの隷属下からひとたび救われた後は「私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。私は私の愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、あなたのおきてに思いを潜めましょーう」（詩篇119:47-48）という告白になることを119篇は語っています。この詩篇はまさに救われた者が神の言葉、掟を喜ぶことが百七十六節ものスペースを割いて語られている驚くべき詩篇です。律法がイスラエルの民に、エジプトに代表される「この世」から救われるために与えられたのではなく、主の恩寵によってすでに贖われた者たちに与えられた「神の国」に生きるための原則であることを、私たちは119篇から学ぶことができます。

105 篇から始まり 119 篇までの十五の詩篇のひとまとまりが、ちょうど春の祭りである過越から、夏の祭りのペンテコステにつながっているというこの見解は、実際に、ペンテコステの祭りには「ニサン月の十四日」は過越の祭り、というような固定された日がないということともよくつじつまが合います。「ニサン月の十七日」の大麥の初穂を主の前に揺り動かす日から数えて「五十日目」というのがペンテコステの祭りの日の決め方で、まさに、キリストが人類の初穂として甦られた日から数えて五十日目の「五旬節の日」に、父なる神の約束の聖霊が降臨され、十字架上で死なれ、埋葬され、甦られたキリストを救い主として信じる者の群れ、教会が誕生したのです。この驚くべき出来事により、旧約に秘められていた神の計り知れない人類救済の御計画が新約の時代に生きる者たちの目に明らかにされたのです。ユダヤ暦をさかのぼれば、西暦 32 年のシヴァンの月の七日（その日はローマ暦の日曜日）にこの記念すべき出来事がエルサレムで起こり、弟子ペテロの語る福音を聞いた多くの者たちの目と耳と心が一度に開かれ、この日を境に、弟子たちの福音宣教が全世界に向けて行なわれるようになったのです。今年は 5 月 23 日にこのペンテコステが祝われます。

さて、このペンテコステで完結される十五の詩篇の最初の 105 篇は、アブラハムからモーセにかけてのイスラエルの贖いの歴史が要点を押さえて実に簡潔にまとめられた見事な詩篇です。その第三と第四段落を冒頭に引用しましたが、イスラエルのエジプト定住とモーセによるエジプトからの解放のいきさつが記されています。神は、アブラハムにカナン之地と永遠の王国を与えるという明るい約束をされたとき、子孫が異邦人の国で隷属下に置かれるという暗い面も預言されました。四百年にも及びイスラエルが隷属状態で苦役を強いられたということはまさに辛い預言の成就でしたが、その間、民は奇しくもエジプトで富と人口を備えられることになりました。この詩篇は、天災、人災はいずれも神が起こることを許されるので起こるのであり、神は両者を通して、ご自分が約束されたことを成就されるという神の支配の原則を歌いあげています。したがって、神が御目的の下で人に課せられる試練、試みを受け入れることは、神の民、神の人に要求されていることなのです。近視眼的にしかこの世の現象を捉えることのできない者にとっては神の御旨は測りがたく、悶々とした日々を送ることが多いものですが、究極的な神の御目的が栄光に満ちたものであることは、兄たちのねたみによってエジプトに売られたヨセフの例から知ることができます。ご自分の民だけでなく、異邦人の王たちの心をも御手の中に捉えておられた神は、ご自分のときが満ちたとき、ヨセフを奴隷からパロに次ぐ大臣へとひき上げられ、未来の奇しきわざのために備えられました。この時点で、紀元前十五世紀半ばにカナンの全土を襲ったひどい飢饉に苦しんでいたヤコブ一族のエジプト移住のお膳立てが整ったのです。神はイスラエルの民をそこで富ませられることを計画しておられたので、ヤコブ一族七十人を一時的にカナンの地からエジプトに移されたのです。

神の道はことが起こった時点では理解されないものですが、この詩篇が導いているように、起こったことを回想するとき初めて、全貌が見えてきます。「主は人々の心を変えて、御民を憎ませ、彼らに主のしもべたちを、ずるくあしらわれた」と記されているように、エジプトでの定住が年を重ねるにつれてパロの圧力は強まり、ヘブル人は迫害下に置かれるようになっていました。異邦人に神の民を憎ませたのが神ご自身であるという神の道は不可解ですが、エジプト人が神の手段として用いられたことは確かです。しかし、神の御目的のために器として用いられたから何をしても許されるかといえば、そうではないことを聖書は至る所で語っています。エジプトのヘブル人に対する非人道的な残酷な取り扱いが咎められるべきで、責任は負わなければならないのです。当時、エジプト人たちが、多産で強く勢力を増していた神の民に対して羨み、憎むという個人的な感情を抱いていたことは間違いなく、この点を義なる神が見過ごされるということは絶対ないからなのです。キリストのしもべ、神の奥義の管理者であることを誇ったパウロであっても、裁きに関しては「私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です」（コリント第一 4:4）と非常に慎重な態度をとり、後世の信者にとって貴重な言葉を残しています。信者、神の敵、未信者に関わらず、神は御目的のためにご自分の裁きの一環を担う手段として用いられることがありますが、その動機や心や感情に対する裁きが免除されたということではないのです。実際、再び神のときが満ちたとき、エジプトのこのような神や神の民に対する敵対意識に裁きが下されたのです。神はモーセとアロンを送ってご計画を実行されました。105 篇では、実際にエジプトの地に下った災いが起こった順には記されていませんが、そこにはこの詩篇の著者の意図があるようです。まず最初に言及されたのは、エジプトが神の要求に答えざるを得なくなった最初の災い「やみ」でした。その後、第五と第六の災いには全く触れず、残りの七つの災いについて三つのグループに分けて言及されています。「血…かえる」によってナイル川と王宮が汚染され、エジプトの栄光が破壊され、「あぶ…ぶよ…毒…いなご」によって、世界の穀物倉としてのエジプトの誇りが破壊され、最後の初子の死でエジプトの未来の希望が絶たれたのです。神の選びの民と神に敵対する民との大きな違いは、出エジプトに際し、エジプトの危機とは正反対に、イスラエルがエジプト中の富を奪って救い出されたことに表されており、真の神の威力を恐れたエジプトはイスラエルが去ったことを喜んだのです。このように 105 篇から始まる十四篇は神の勝利、民の救いを歌いあげ、119 篇に象徴されるシナイ山での律法授与による神権政府樹立につながっているのです。